

新

歌人群像

三ヶ島葎子

● 歌に全力を傾けた近代女性

● 秋山佐和子 ●



搖籃期

歌人、三ヶ島葎子は一八八六（明治十九）年八月七日、埼玉県入間郡三ヶ島村（現・所沢市）に、三ヶ島家の長女として生まれた。父は三ヶ島小学校の校長で、母は神奈川県西多摩郡伊奈（現・東京都あきる野市）の岩走神社の代々の神官の娘である。父方の曾祖父は『安国宝鏡』三巻を著した名神官で、中氷川神社の境内には今も顕彰碑が立つ。

葎子は少女時代に『源氏物語』を読み、短歌を作り、十七歳から三十五歳まで克明な日記を綴った。短歌も、四十二歳で亡くなるまでに六千首余りを遺し、小説や散文八十余編も著している。生涯を通じて向学心を抱き努力家だったのは、学問にいそしむ父祖の血筋によるものと思われる。

一九〇二（同三十五）年四月、葎子は埼玉県立女子師範学校に入学する。日記に記された闊達な寄宿舎生活は、まるで『足長おさん』の主人公のようだ。だが残念なことに、葎子は肋膜炎を病み、三年生の十一月に休学して、翌年九月には退学届けを提出した。高価な薬代は寒村の小学校校長で子だくさんの一家の家計を圧迫し、二人の弟は奉公に出され



た。異母弟の一郎はまだ十二歳だった（この一郎は、のちに黒沢明監督の「七人の侍」などで活躍した個性俳優、左ト全である）。

継母（生母は七歳の時に死去）に気兼ねをし自殺も思う葎子だったが、三年の闘病期を経て回復した。東京に出て、内職や住み込みの家事手伝いなどをしたあと、生母の実家の世話で、東京府西多摩郡の秋川溪谷上流の養沢川沿いにある小宮村小学校の代用教員となった。一九〇八（同四十二）年のことである。

葎子は二十三歳から二十九歳までを、村の先生として一人の暮らしをたて、生徒や村民からも慕われていた。生徒二百人を引率して御岳山に登ったり、夜は下宿で短歌や散文を綴っては「女子文壇」に投稿する毎日だった。葎子の短歌は清新で比喻に優れており、短歌欄の選者の与謝野晶子の目に留まって新詩社に入社し、「スバル」にも歌が載るように

なった。また素直さと流麗さを備えた葎子の美文や書簡文は、「女子文壇」の編集者の河井醉茗や横瀬夜雨らに熱く支持され、後年、中村星湖に私淑して「早稲田文学」「ホトトギス」などに小説を発表する素地となった。次は、そのころの歌である。

あめつちのあらゆるものにごとよせて
歌ひつくさばゆるされむかも

名も知らぬ小鳥きたりて歌ふとき我も
名知らぬ人の恋しき

われ寂し青き李の花に似て弥生の空の
もとに悩める

一首目は、「天地万有の全てに託して歌いきったならば、歌の女神は自分の存在を認め下さるだろうか、そうであればいいものを」の意。二、三首目は、恋を待ち望む娘心がういういしく歌われる。葎子の文学熱は旺盛だ。一九一〇（同四十三）年、若山牧水が「創作」を創刊すると聞くと、すぐに投稿し掲載を待ちわびるのだった。

寂しさを歌ふ人なくなりし時ろをまの
国は亡びしときく

女居て楮さらせり白梅の咲くと見下ろす
す谷の流れに

一首目は、詩人よりも権勢欲の長けたものの支配したローマ帝国滅亡を歌う。歴史や世界の動きに強い関心を持つ葎子は、この年、ハレー彗星が接近し、谷間の星を毎夜眺めてもいる。また二首目のような、「軍道紙」という和紙を生産する村の暮らしも歌に取り入れる。恋の歌を選ぶ与謝野晶子とは異なる若山牧水の選歌も、葎子には魅力だったろう。

葎子は「青鞥」にも投稿する。これは与謝野晶子が平塚らいてうに頼まれて推薦したようだ。同じ新詩社の岡本かの子や原阿佐緒も「青鞥」社員となったが、歌数は葎子が圧倒的に多い。葎子は一九一二（同四十五）年三月から永久終刊の一九一六（大正五）年二月までほとんど毎号、数十首から百首もの短歌の一挙掲載と、合計一〇五六首を発表した。

葎子が溢れるように歌を作ったのは、このころ、二歳年下の文学青年、倉片寛一と恋をし、結婚、出産と女性の人生で一番充実した輝く時だったからだ。平塚らいてうが、「青鞥」の葎子の歌を自伝「元始、女性は太陽であった」の中で、「ロマンチックで夢幻的、絢爛たる歌」といい、「恋する女の微妙な照りかげりが、くまなく歌いつくされ、息づまるほどの迫真力をもって、同じように若いわたくしたちの胸を打ったものでした」と語っ

三ヶ島葎子

葎子。宮城県宮床村の原阿佐緒邸の庭で
(1918年7月)



ているのは、次のような歌であろうか。

昨日までけふの昼まで君と見し山暮れ
果てて雁鳴きわたる
いま誰か山に火を焚くああこの身煙と
なりて君に往かまし
新しき女ぞ夢の女ぞといつの日待ちて
我をとなへん
みづからを偽るよりも苦しかりありの
ままなる我を語るは

だが、結婚の現実には厳しい。教師を辞めた葎子と失職中の夫の暮らしは、三度の食事に事欠く。そんな中で葎子は、一九一四（大正三）年の暮れに女兒みなみを出産した。寛

一の友人で、のちに画家となる中川一政の母に鹽を借りての出産であった。

家のうち鍋などさげてゆきかへるゆふぐれにきく秋雨の音

何よりもわが子のむつき乾けるがうれしき身なり春の日あたり

子のためにただ子のためにある母と知らば子もまた寂しかるらん

葎子の歌は夢幻や観念から、地についたものとなっていく。「むつき」を歌ったのは、短歌の長い歴史の中で、おそらく葎子が初めてであろう。三首目の、子の成長を一番の喜びとしながら、なお一個の人間として何をなすべきか自問する歌は、妊娠中の平塚らいてうの論に比べて、女性の子を産むことで、人生を拡大し深化できる、と「青鞥」に論を発表した頃の歌だ。葎子がこの普遍的な命題に自覚的であったことは記憶されるべきだろう。

歌を杖として

生活苦の中で歌や小説に必死に取り組む葎子だったが、ついに病が襲う。感染を恐れて子どもは所沢の夫の両親の元で育てられ、時々会うのみとなり、夫との不和も深刻さを

増すばかりだった。「青鞥」も終刊して歌の発表誌を持たない葎子は、「女子文壇」時代からの親友、原阿佐緒の勧めで、一九一六（同五）年に「アララギ」に入会した。

よく遊び疲れたる子は眠りたり生れし
その日もこの顔なりし

床の上枕さすべく抱きおこす吾子のか
らだの汗ばみて重し

さ夜ふけて釘打つ音す隣にて松を打つ
ならん小さき松を

子を思う親の気持が素直にしみじみと歌われた二首である。現在はテレビ局やホテルが立ち並ぶ東京・港区六本木あたりだが、三首目のように、大正期の貧しい長屋の暮らしを、葎子は何の虚飾もなく淡々と歌う。心の悩みも歌に託す。

訴ふべき悩みにあらず声立てて泣けば
寂しも人あらぬ部屋に

うらさびしき世に生きながらあやまち
を練りかへす我とそを怒る夫と

物干の日向に靴を磨きみる向かひの妻
はもの思はざらむ

これらの歌は、一九二〇（同九）年二月号の「月評」に取り上げられ、島本赤彦や釈迢

左から、倉片晶子（夫、寛一の妹）、葎子、
倉片みなみ（1924年8月）



空、石原純らが絶賛ともいえる高い評を行った。

一九二二（同十）年二月、念願の第一歌集『吾木香』を出版した葎子だったが、秋には、「アララギ」を破門された。東北帝国大学教授であり物理学者の、「アララギ」の重鎮である石原純と原阿佐緒の恋愛が世間の知るところとなり、原阿佐緒を一方的に誹謗するスキャンダラスな報道に、阿佐緒擁護の文章を「婦人公論」などに書いたためだった。

葎子の孤独と悩みは、さらに深まる。単身赴任先の大阪から帰京した夫を追って若い女性が入京し、同居生活が二年続いたのだ。

いくたびのこらしめによりためさるる
われの心ぞただに忍ばむ

生けるものを死にたるものとあきらむ
るわれの心の堪へられなく

みづからをあざむくまでにこらへるし
われの心は知る人なからむ

この時、葎子の生きる杖は短歌だった。近くの霊南坂教会の夕礼拝にも何度か出席するが、自分の孤独や諦念を訴える対象は宗教ではなく歌だと知る。歌うことで自分の気持ちを整え、立ち直る力を与えられる葎子だった。

夫と別居し、一人暮らしを始めた葎子は、脳溢血に倒れ、右半身不随となった。しかし回復し、歌は書けるようになる。

一九二四（同十三）年、古泉千樫、北原白秋、釈道空、石原純らにより「日光」が創刊され、葎子も同人に迎えられた。

春の雨けぶる櫛の梢よりをりをり露の
かがやきて落つ

わが家とさだめられたる家ありて起き
臥しするは楽しかりけり

久々に子の読み方を聞くものかこゑほ
がらかに水流すごとし

久に逢ひて心沈みぬつねに病みやがて
死ぬべき母持つわが子

葎子の歌は、口語歌も盛んな「日光」で、

本来の自由で伸びやかな歌風を取り戻した。が、一九二七（昭和二年）三月二十五日、葎子は脳溢血の再発で昏倒する。駆けつけた娘みなみが、川越高女の入学試験に合格した、と告げると深くうなずき、翌二十六日永眠した。枕元の歌の手帳には、

屋根の上に水づきてつもれる春の雪や
や透きとほり夕晴れにけり

ひとときのあやにかがよふ夕雲をせま
れる屋根のあひだに見たり

の歌ほか数首が遺されていた。病床から向かいの家の屋根に積もった春の雪が、夕日に透き通る様子を眺め、狭い町の空の上で、ひとひらの夕雲がたとえようもなく美しく輝く一瞬を見守る。この世の全ての悩みや苦しみがから解き放たれたかのような絶唱である。斎藤茂吉は後年、葎子の真実な歌は万葉歌人の風格、と評した。

自分の生きた証を世に遺そうと、歌うことに全力を傾けた葎子。一人の近代女性の生き方とその歌は、読むものの心に深く沁みとおろり、また短歌のもつ魅力を十全に語りかけてくれる。

（あきやま・さわこ「玉ゆら」）